

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 豊中市立第十一中学校 (※正式名称を記載)

種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☐ 小学校 ☐ 小中一貫^{※注1}

☒ 中学校 ☐ 中高一貫^{※注2} ☐ 高等学校

☐ 教員養成大学 ☐ 専修学校、各種学校

☐ 特別支援学校

☐ その他（例：小中高一貫）

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒560-0005

豊中市西緑丘2丁目11番1号

E-mail t_dai11chu@tss.toyonaka-osa.ed.jp

Website http://www.toyonaka-osa.ed.jp/cms/jh11

幼児児童生徒数 男子 555名 女子 521名 合計 1076名

幼児・児童・生徒の年齢 12歳～15歳

2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

※報告書提出時点～平成30年3月末までの活動は、予定（見込み）として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要（800字程度＋活動内容を表す写真数枚）

本校は、「人権尊重の精神を基盤として、人・自然・ものごとの真理を探究し、自他の共生に向けて主体的および協同的に考え行動できる生徒の育成をめざす」ことを学校教育目標として、教育活動に取り組んでいる。本校は、ESDを多様な他者との協働学習による人権意識の向上や、コミュニケーション力の育成に資するものと捉え、実践を行っている。

具体的には、①学級活動は班単位での活動を主とし、多様な意見をもつ他者とのコミュニケーション力の向上を図ること。②教科授業においても、グループワークやペアワークを多くとり入れ、多様な価値観を持つもの同士の相互啓発による学力の定着伸長を図ることを活動の中心に据えた。この際、以下の点に留意した。

1. 課題（目標）の明確化

生徒に主体的に活動させるためには、目標を明確にし、共有化させる必要がある。さらに、学習の手順、見通しをきちんと示すことによってどうやったら目標に到達できるのかというロードマップが明確になる。

2. 個人の二つの責任

あくまでもグループ活動をするけれど、個人の責任〈学習〉を最後まで問い続ける個人で考えた後、グループで考えて全体で共有していく場合も、個人とグループや全体の責任を意識させること

3, 参加の平等性、活動の同時性

たとえば、一人への発問するが、発問された一人の背後には他のクラスの全員がいる、発問されていない生徒も同様に考える、そういった授業を構築することで授業の質が高まっていく

4, 探求の単元づくり

(1) 生徒の実態を把握し(2)つけたい力〈達成目標〉と、どんな評価方法でそれを測るかということを確認し、(3)教材を選ぶ(4)それが、現代社会の問題や生活に関わる問題であるか(5)どういう方法で学んでいくかをプログラムしていく。



グループワークの状況

※チェック事項 1-1、2-1 に対応

(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野（複数選択可）

<input type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	■ 6. 国際理解、文化多様性	<input type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	■ 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	■ 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間（複数選択可）

■ 1. 教科の時間	■ 2. 総合的な学習の時間
□ 3. 特別活動等	□ 4. クラブ活動
□ 5. その他(自由記述)

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

市販の書籍等の使用はなし

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

本校では、多様な他者との協働学習を通して、知識理解の定着とともに、新しい知を生み出すためのコミュニケーション力の育成をめざし、教育活動に取り組んでいる。ESDにあっては、地球上にいるすべての人々の明日が今日よりも幸福である社会を築く力を、生徒に身につけさせることを目標としている。このためには価値観の異なる他者とのコミュニケーションや建設的妥協による新たな知の創造が欠かせないものであり、本校の教育目標と合致するものと考えている。

ただ外国の学校と交流するだけでなく、校内のあらゆる教育活動の場面で、班活動やグループワークを実施し、身近にいる価値観の異なる他者とコミュニケーションを行う場を常に設定している。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

校長を主として、各部、各教科の代表者と連絡を密にし、教育内容の調整・精選を図っている。時間数については学習指導部の担当者を中心に調整を進めているほか、学習内容・教材については各学年の担当者を中心に準備を進めている。

実施した内容については、年度末に各学年等から職員会議の場で周知し、各学年、教科等の学習内容の整合性を保つよう努めている。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/

外部)の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。
(200字程度)

※チェック事項 1-5 に対応

実施した教育活動については、生徒による授業アンケート、学校教育自己診断を通じて評価活動を行っている。評価の結果は学校評議員会で報告し、講評を得るようにしている。現在のところまだ、生徒の大きな変容など顕著な変化は見られていない。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度)

※チェック事項 2-2 に対応

教育活動の内容については、毎年発行している研究紀要において、報告発信している。報告の内容は授業研究の内容・目的・指導計画・学習指導案等である。公開研究授業についても指導助言者の講評内容も含めて掲載し、公表している。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度)

※チェック事項 2-3 に対応

現在、特に交流活動は実施していない。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度)

※チェック事項 2-4 に対応

現在のところ、特に実施していない。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

ユネスコスクールの取組みを通して、グループワークやペアワークを活用し、他者とのコミュニケーション活動を中心とした授業研究の取組みが実施されている。教員間では授業改善・研究に対する前向きな姿勢が醸成されつつあり、若手教員に押付けることなく、中堅・ベテラン教員を授業者とする校内授業研究会も実施されつつある。

（3）平成 30 年度の活動計画（200～400 字程度）

グローバルな視点で政治や経済における国家間の枠を超えて複雑に絡み合っている。その中ですべての人が幸福を享受できる、持続的な発展を可能とする社会を形成していくためには、価値観の違う他者との間で、建設的妥協を図っていかねばならない。そこでは、従来型の学習では克服・解決できない問題に向き合うためのキー・コンピテンシーとして、「相互作用的に道具を用いる能力」「異質な集団で交流する能力」「自立的に活動する能力」が求められている。

上記のことを実現するために、従来の伝達的コミュニケーションではなく、会話のやりとりの中で相手の反応によって次の発言が変わっていく構成型コミュニケーションが求められていく。教師の持っている知識をいかに学習者に伝達するか、ではなくいかに学習者と学習者をつなぐ、あるいは学習者と知識を対話することで豊かな学びが生まれる。たとえば単に板書をノートに写すだけではなく、ふり返りをする中で、自分の中にいったん落とし込んで、自分の言葉で語り直すプロセスを創っていくことを大切にしていけることが必要である。

以上のことから、「多様な価値観を持つ生徒の相互啓発による学力の伸長～建設的妥協による新たな知識・技能の創造と獲得～」を研究主題に授業研究を実施していく。